

自閉症児の母親はいかに子どもを「分かる」か

—対話から探る 自閉症児への向かい方—

山崎 徳子*

How Does Mother of Autistic Child “Understand” Her Child?

—Seeking the Way towards Autistic Child from Dialogue

Noriko YAMASAKI*

From dialogue between writer and mother of autistic child Momo, Kaoru, ‘understanding Momo’ is investigated.

Understanding Momo’s language tends more to the TEACCH Approach of instillation by combining visual information with scene. Although Kaoru is happy for Momo’s action change and ability, she cannot know lacks.

For writer’s method, relationship between Momo and place is developed. By sharing the place, feeling between them is connected.

How ‘others’ are represented in Momo varies by depth of relationship. Moreover Momo will find emotion of closeness sharing and seek someone close. Getting in touch with such figure, Kaoru got around her feeling to deep inside the child.

People related to autistic child reveal something they share and instill happiness to child’s negative emotions. Before considering autistic child as curing subject, they live in an unaffected relationship of ‘to bring up to be brought up’ in the shared place. By relativization, a mutually independent relation between mother and child is possible.

key words: autistic children, mother, TEACCH, intersubjectivity, development of relation

1. 問題と目的

現在自閉症は、これまでに生まれたさまざまな理論的立場を反映して、①社会性の障害¹⁾ ②言語・コミュニケーションの障害 ③想像力の障害と、それに基づく行動の障害がその基本障害とされる(ウィング, 1998)が、乳児と養育者のコミュニケーション研究の進展により、双方向の交流ができないといった社会性の障害と言われる点について、

情動の役割と関係性が問題にされるようになってきた(たとえば別府, 1997; 滝川, 2004)。小林(2000)はコミュニケーションは情報のやり取りという水準の象徴的コミュニケーションと、共鳴を基本とする情動的コミュニケーションによる二重構造を持ち、自閉症児²⁾はその独特の知覚様式から情動を共有することが困難であり、それが母子の関係障害の一要因になるとする。トレヴァーセン(2005)は乳児は養育者との共同性の中で、相互的に楽しいコミュニ

* 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程
Graduate School of Human and Environmental
Studies, Kyoto University

¹⁾ 「障」は妨げの石という意味である。障害を個に還元しないという考え方から「障害」を使用する。

²⁾ 「自閉症のある子ども」という意味で使用するが、現時点での一般的な用語である、先行研究の石井(2002)に準拠した。

ケーションや意図、経験、情動を共有しようとする「動機」を持って生まれてくるとして、自閉症児は初期に発達する間主観性の機能に深刻な障害を受けたためであると想定している。通常の子育てにおいて、養育者が子どもを理解し、子どもも養育者を理解するといった間主観的な相互感知の中で初めて実現されていく親密な情動の相互交流をスターン(1985)は情動調律(affect attunement)と呼ぶ。養育者の側が情動の交流の全体的な流れを導いているが、同時に子どもの側からも調律を受ける相互的なものであるゆえ、子どもの間主観性の弱さは、子どもを育てるという営みに困難が生じさせると考えられる。

筆者は小学校教員、また障害児保育のボランティアとして自閉症児とその家族との出会い、それを契機に、療育の現場で身体が感受するものをベースに自閉症児と気持ちがつながることを目指して関係を作り、そのプロセスを描くことをしてきた(山崎, 2005)。筆者の自閉症児理解はトレヴァーセン(2005)の言う、間主観性を媒介にした直感感受性によって世界や人々への興味を導くような子どもの動機に応答するあり方に通ずるものであるが、自分もわが子を育てながらかわってきた、自閉症児の母親たちの、子どもとともに生きる姿からの学びがそうさせたと言ってよい。この母親たちは、子どもにこうなって欲しいという願いを持ちつつも、子どもの一歩前にいてその能力を引き出そうとするのではなく、子どもを分かりたいと思い、お互いが言葉を介さない間主観的に身体に響き合うものを感じ取り、気持ちがつながれる瞬間を子どもが分かったとして喜ぶ。それゆえに分かろうとし分らない場面では落胆することもあり、ここに喜びやつらさが凝縮されていた。

2005年の夏休み、筆者は指導員として障害児学童保育P³⁾で20日間ほど障害児とその家族と過ごす機会を得た。Pは常時開設の学童保育ではなく、子どもたちが安全に楽しく過ごす余暇の場として保護者が設立し、運営しているものである。市内の小・中学生10人(自閉症6人、ダウン症と難聴の重複1人、知的障害3人)が登録しており、有償の

指導員が2人(筆者はその1人)、大学生・高校生のボランティアが子どもの数だけ配置され、1対1で担当する。

Pで新しく出会った自閉症児の母親たちは、自閉症児の認知特性が対人関係、社会性の問題と関連しているとして、①自閉症児・者の知識やスキルを伸ばしつつ、②環境をより理解しやすいものにすることを目標にする構造化のプログラム(メジボフラ, 2007)を何らかの形で生活の中に取り入れている。彼女たちは子どもが大人の意図した行動をしなかったとき、「支援が足りないのだ」と言う。この対応は、通常のかかわりでは子どもが分からないというところから導かれたものであり、このプログラムに従って子どもが行動できたとき、子どものことが分かるようになったと語る。その姿勢は、これまでの筆者の体験から導かれた姿勢とは必ずしも一致しない。小林(2000)は自閉症児理解について、行動を観察するのか、気持ちを感じ取るのかの視点を提出しているが、母親たちの子どもを「分かる」姿勢には前者の視点が際立ち、子どもに豊かな余暇を願う彼女たちの努力には共感することが多いだけに、筆者はその懸隔にとまどい、心情をぜひ知りたいと思った。

自閉症児の母親について、これまで数多くの研究がされてきた。これらは自閉症児とその家族を支援するという善意から成り立っている。医学、心理学双方の立場から、子どもの療育効果を高めるための共同療育者に母親を位置づけるもの(たとえば奥田ら, 1997; 坂本, 2000)は、行動観察と行動に応じた対応を一貫して行うことによって、適応行動を積み重ね、不適応行動を減らしていくことを重視する。東條(2007)は発達障害児・者と相対する医療スタッフの役割の1つは、家族を支援者として振る舞える家族・養育側の立場への転換をいざなうこととする。これは、支援する者が、子どもの障害を軽減し、発達を促進することを自明のこととし、母親もそのようなニーズを持っていると見なし、母親が障害を抱える子どもの日々の生活と成長のための必須の要因・基盤として機能することを当然のように求めているのではないか。一方、子育て支援の観点から母親のストレスや困難を明らかにし、そのニーズを探索するというものがある。これは母親を個別に取り出し、質問紙等の回答を分析する(たとえば

³⁾ 県の障害児夏休み支援事業の補助を受け2002年に発足。

坂口ら, 2007)。何が困難だったかと問われれば母親は自ずと支援される者となり、子育ての時々にと子どもの気持ちに付き合い、共に楽しんだり喜んだりした事実を表すことはできないであろう。

自閉症児の母親が子育ての主体となるべく支援するために、そのニーズや困難に迫ろうとするならば、先に示した「共同療育者」「支援される者」というあらかじめ想定された枠組みを離れ、日々の「育てる」営みの中で、子どもに対し、母親が何を願っていたか、その願いを背景に子どもの姿をどう受け止め、いかに感じていたのかという「分かり方」の内実を描くことが必要になってくる。

そこで本稿では、自閉症児、桃のPでの姿を筆者が感じ取ったことを中心にエピソードとして記述し、母親である薫さんとそれについて対話し、筆者と薫さんの桃の「分かり方」を間主観的な把握に注目して検討し、構造化のプログラムを行う背景にある親の心情を考察することと、「育てる」という枠組みの下での、自閉症児への向かい方を検討することを目的とする。

2. 方 法

本稿の方法論は「関与・観察とエピソード記述」によった(鯨岡, 2005)。Pの現場で筆者は①出来事がいかに起こったのかを客観的に「見る」存在として、②関係を形成する一方の極として何らかの情動を「感じる」存在としてある。保育、プレイセラピーの現場で、かかわりの中から子どもの内面世界を理解しようとする試み(たとえば須原, 2008; 宇田川, 2005)にこの方法論が用いられ始めた。さらに母親との対話にもこの手法を用い、観察と対話を組み合わせる2段階の構造を持つ。この対話における研究者—筆者も日々の出来事に主観的な意味合いを持たせ生活している主観的な存在であり、協力者と研究者の出会いには主観と主観の出会いであると言えることができる。対話は単に表出された言葉のやり取りではなく、声のトーン、しぐさ、表情によって交わされるものすべてを含み、すでに語り手と聞き手の情動を介した共同作業としての意味生成の場なのである。この点で字義どおりに意味づける従来のインタビューを用いた研究(船津ら, 2002)と一線を画す。

実践記録は2005年7月～8月毎回、保育終了後

できるだけ早く事例として文章化した。

対話は桃、筆者、薫さんの三者が場を共にしたときのエピソードの中から、4つの場面を、筆者の「分かり方」を考察したものとともに、あらかじめ薫さんに読んでもらい、その場面を振り返りながら実施(2005年9月13, 21日 於 薫さん宅、各2時間程度)し、ボイスレコーダーに録音した。

研究協力者(すべて仮名)

桃(当時の年齢、様子)奈良県在住。公立小学校2年生。両親、2歳違いの弟こうじの4人家族。2歳半で医師から自閉傾向を示唆され、4歳のとき自閉症と診断される。細身で身体の運動能力に問題はない。障碍児学級に在籍しているが、算数以外の時間は障碍児学級の先生とともに親学級で過ごしている。現在困っていることは、「興味があるものにひきつけられてしまう」「先の見通しが持てないと不安が募り、他のことを楽しむことができない」(「」内は母親薫さんの説明)である。

薫さん 桃の母親で、Pの中心メンバー。初対面時から、明るく、積極的な印象を受ける。桃が幼稚園年少時から、生活の中で、構造化のプログラムの一部を活用している。

指導員田中君 快活な男子大学生、教育学部3回生。高校生のころからPのボランティアをしており、自分も楽しみながら、場を楽しい雰囲気にしていくことができ、どの子どもからも慕われ、保護者の信頼も厚い。この年から指導員になった。筆者が計画し、彼が現場を仕切る役割分担である。

3. 事例⁴⁾と考察

まず、前半に桃と筆者のエピソードと考察3つとそれに関する対話を提示する。

エピソード1 「スケジュール」によって動くように見える桃(8月9日)

場所—母子センター2階。調理室と20畳ほどの和室がつながっている。今日は焼きソバ作りがメインのプログラム。何を買うか全員で相談し、それぞれが買う物のカードを持ってスーパーに出発する。

⁴⁾ 研究協力者(薫さん)には、対話時に研究趣旨を説明し、公開することの同意を得ている。

帰ってくると子ども1人ひとりからおつりとシートを私がもらうことになっている。桃はいつでもおり順調に買い物をすませ、一番に部屋に戻ってくる。

桃は筆者を見ることもなく、財布と帽子を入り口のテーブルに無造作に置き、部屋の隅に置いてあったキーボードに直行した。筆者は財布を拾い上げ、桃のところに行き、目の前にそれをかざし「桃、のりちゃん（筆者）におつりちょうだい」と言った。桃は、財布も筆者の顔も見ず、嬉々としてキーボードで遊んでいる。単に通じないというより、筆者がそこにいることが桃に感じられていないかのような様子である。そのため、再度の「おつりちょうだい」は調子が少し強くなった。筆者が少しひるんだ感じでその場で躊躇していると、それに気づいた薫さんがすばやくやってきて、用意していたスケジュール表を見せながら、「おつりを渡します」と桃に言う。桃は即座にキーボードから離れ、筆者におつりをくれる。薫さんの表情が「上手にできるでしょう」というふうに筆者には見える。

〔考察〕 桃はこのキーボードのボタンを押してさまざまな楽器の音を聞くことがお気に入り、手持ち無沙汰になるとキーボードに向かう。桃のこの姿を、筆者は、今、楽しんでいることをさして制止する必要もないとも思う一方で、決まりどおりにおつりを渡すことを「させる」ことに向かう気持ちが入り混じっていた。薫さんは、桃の担当ボランティアに対しても、話しかけるときにはあまり感情をいれない一定のトーンの「ですます調」で語りかけるよう依頼していたが、ここで筆者はわざといつもの話し言葉で語りかけた。「ひるんだ感じ」があったのは、桃が行動しないことより、筆者のはたらきかけに桃から筆者に返ってくるものが何もなく、つながりが感じられなかったことに軽く失望したからだった。

薫さんが示したスケジュール表に従って桃がてきばきと行動したことに対して、スケジュール表を示せば本当に動くんだという驚きと、これでいいのかなあという入り混じった思いがあった。

この場面は、筆者と桃の二者の関係の出来事のように見えて、実は桃の背後にいる薫さんの存在が筆

者と桃それぞれに影響を及ぼしている。薫さんの行為は、純粹に、Pの流れに乗っていない桃の行動に困っている筆者を、親がフォローするべきだと思った結果だったろう。しかし、筆者には、構造化のプログラムに与しないスタンスが、筆者が自閉症の「特性」を理解していないと思われるのではないかと気にかけているところがあり、それをうまく説明できるような関係がまだ作られていないこの段階で、筆者には薫さんの対応が桃を「操作する者」として見えた。そして、薫さんと桃の間に何が通い合って桃が行動するのかがつかめない状態だった。

エピソード2 “座布団リレー” 桃の情動―くやしき（8月18日）

夏休み限定の保育も中盤を過ぎ、子どもが「分かる」遊び、子どもが喜ぶ遊び、私はこの時期プログラムの選択に少々苦しんでいた。構造化のプログラムに則れば、準備は隙隙がない。ゲームの内容を構造化しようと思えば、要素を1個1個ばらして写真で提示することが必要だ。実際、調理の手順はそうしていた。母親たちにゲーム大会をすることは伝えたが詳しい内容は伝えていなかった。母親たちがそれをすべてスケジュール化することは非常な手間であるし（彼女たちはやり遂げるだろうが）、そのために遊びの種類が限定されることは本末転倒だろうと思われたからである。田中君に今日のゲーム大会は少し不安がある旨を伝えたところ「なんとかかなでしよう」と言われた。私はいつの間にか、日々の保育の流れがスムーズに進むことに目がいき、自分が「楽しむ」ことをすっかり忘れていたことにはっと気づかされた。このとき、多少進行がぎくしゃくしても、子どもたちの様子を見て進めようと思えた。

この日の参加者は中学生2人、桃きょうだいだけで少ないことが分かっていた。身体を動かすこととゲーム性のあるものと考え、そのバランスに苦心した。中学生2人をチームリーダーとして、年長者の自覚を持たせ、2チームの対抗戦の形で進めようと計画した。最初の“座布団リレー”は座布団に座り両端を持ち、座ったまま全身で跳んで進むリレー遊びである。

桃は1回目こうじと、2回目田中君と対戦して、連続して負けた。その瞬間、桃の表情はさあっとく

もり、涙ぐんで、部屋の隅で片づけをしていた薫さんの横に座る。桃は薫さんに何をうったえるでもないが、うつむきかげんで、悔しさにじっと耐えているようだった。薫さんも用を続け、桃に声をかけるでもなく、今は、手出し、口出しすべきではないと思っているように見えた。他の人たちはあーあという感じで、ことの推移を見守っていたが、田中君が場をとりつくろうように「桃、もう1回しよう」と、明るい声で誘った。桃はその言葉に反応せず、まだ薫さんのとなりにいたが、次の瞬間、さっと立って、帽子をかぶり、靴をはき、悲しそうな顔のまま「分からない」とつぶやくとドアに向かう。そこで「分かりません」とさらに大きなはっきりした声で言う。今にも部屋を出て行きそうな雰囲気だったので、筆者もすぐ靴をはき、後を追う。桃が出て行かないことを確かめつつ、「じゃあ、次のゲームに移ります」と次の“人形かくし”のルールの説明を始めた。

[考察] “座布団リレー”に負けて桃がすねた様子を見せたことは勝ち負けに対する情動が発達していないのではと漠然と判断していた筆者には意外だった。桃の気持ちに定位して桃をとらえるのではなく、「自閉症児」である桃を見ていたのかもしれない。弱ったなと思うと同時に、エピソード1とは違い、桃の気持ちが筆者にしっかり伝わってきた豊かな情動の表出に新鮮な驚き、うれしさも感じていた。田中君の誘いかけに桃が応えた「分かりません」は初めて聞く言葉であり、抑揚のない一本調子の表現だったが、筆者には、桃の悔しさ、混乱した気持ちの表出として受け止められ、その情動の強さが印象づけられた。そして、本当に興味が途切れてしまったら、ふらっとどこかに行ってしまう桃が外に出て行かなかった姿から、負けたことは愉快ではないが、まだそこに居続けたい気持ちを感じた。一方、常に子どもに理解できるように提示し、子どもができることをしている薫さんに、桃が挫折感を味わったように見え、そのことが筆者に対する薫さんの信頼に影を落とすのではないかとという心配もあった。

桃がとにかく部屋を出て行かなかったことで、その場の人々には安堵した空気が広がった。そこで筆者は、桃が理解できるようにさらに説明を加えることはせず、場面を転換するほうを選んだ。

エピソード3 “人形かくし” 桃の情動—喜び—(エピソード2の続き)

“人形かくし”は、鬼が部屋から出ている間に、部屋のどこかに人形を隠し、見ている人たちは鬼が人形の隠し場所に近づくのと拍手を大きくし、鬼はその拍手の大きさを頼りに人形を見つけ出す、というものである。ゲームが始まると、桃は好奇心がわいたらしく、いつの間にか靴を脱いで部屋にいる。

ゲーム2回目の鬼、こうじがにこにこしながら入室して人形を探し始めると、隠し場所を知っている桃はすぐその場所に行き、人形を取り出し、「見つけたあ」と笑顔で叫ぶ。3回目は学生が鬼になり、こうじが人形を床の間の横の小さな物入れに隠す。鬼が入室してくると、桃はまたふらふらと人形がある場所に近づく。こうじが桃を遮るように近くを歩くがやはり桃が取り出し「見つけたあ」と叫ぶ。薫さんは「そういう遊びじゃないんだけど」と苦笑いをしている。

いよいよ桃が鬼になる。靴をはいて廊下に出、隠し終わるのを待っている。「もういいかい」「まあだだよ」を繰り返し、うれしさを抑えきれないという表情で、和室にもどる。前回までに人形が発見された場所、長机の間、床の間付近と見ていく。見つからないが、あきらめず、まだ目の輝きは始めのまま。物入れのカーテンをシャーッと開ける。人形を持った手を高々と上げ、はじけるような声で「見つけたあ」と叫ぶ。周りの人々もみんな笑顔になり、部屋全体が大きな喜びに包まれたように感じられる。

[考察] この遊びは「隠す-見つける」のルールが理解されていないと楽しめない遊びであり、桃がそのルールを理解できるかどうかを筆者が見たいと思っているのではないかという疑念を自分自身、払拭できず、実行までたいへん迷いがあった。当初、筆者が計画していた“人形かくし”ゲームは成立しなかったが、2回目のこうじの鬼の番のときに、「これはいいぞ」という確信を持てた。やはり桃がルールを理解していないと見える光景だが、自分の情動の動きに従って動く主体としての桃を筆者は見えており、桃が意図していないにもかかわらず、桃の喜びが伝わり、筆者の喜びになる体験だった。桃の生き

生きた姿に接したこの時点では、薫さんが何を気にしているかは筆者に意識されてはいなかった。

ここから薫さんとの対話を提示する。薫さんとはひと夏を共に過ごし、いっしょにPを作り上げていく仲間という感覚に変わっている。この対話は全体に明るいトーンで、つらかったことも淡々語られた。エピソード1の話から、まず、構造化のプログラムに出会うまでの語りになった。

対話1 乳幼児期の困難

(どこかおかしいなと思うまでの話があって)

薫さん：様子見ましようから長かったんですよ。

自閉傾向の意味も分からないし。医者に説明してもらっても全然ぴんときないし。まだ、「光とともに」(戸部けいこ作)も出てない。困ってさすがに。

筆者：気持ち的には？ 今聞いている限りでは…

薫さん：そら大騒ぎですよ。(けらけらと笑う)

筆者：暗ーく大騒ぎなん？ 前向きに大騒ぎみたいな感じするんやけど。

薫さん：泣いてばかりでしたね。やっぱり

筆者：本当(意外な感じ)。実際子育てもしんどい？

薫さん：しんどかったですね。さっぱり分からへんし、とにかくこっから(居間)、があーっと外へ出て行こうとするし。チェーンして鍵かけて結局。できるところはすごいできるでしょう、障碍の特性ででけへんところがあって、ここはこんなにできてるのに何でって。家の中ほんまめっちゃめっちゃですよ。乳児がおって1人パニック起こしてて、伝わらへんし、私も怒るし。桃に怒ってもしようがないんですけどね、今考えたら。人から言われてもいややし。(桃が)いやーってなってるから夏も窓開けられない、閉めてクーラーかけて。さすがにこの声が外に聞こえたらいかんやろっていう気はあるんですよ。自分の中に。毎日大騒ぎ。

筆者：1日1日過ごしていくって感じ？

薫さん：1日が終わらない終わらないって感じですね。あんまり覚えてないんですよ。一番ひどかったときのことは忘れないと進んで行かれへん。自己防衛やろな。それ覚えてたら生きていけない。

感じ」は、混沌とした中でも1日1日を過ごしていき、ある日振り返れば、「分かる」存在に変化していることに気づくという、発達が自ずと進んでいくように見える「健常」な子どもを持つ者の感覚だ。それを薫さんは「1日が終わらない終わらないって感じ」と表現したことに改めて心に突き刺さるような違いが感じられる。

薫さんと筆者のこの違いは何であろう。鯨岡(1997)は、あやしかける母親とそれに応えて笑顔になる子どもの事例から「あやす=微笑む」という母子の様相はその行動の関係よりも、「かわいいーうれしい」という情動的な関係が、母親のさらなる子どもへの愛情と育児への自信につながり、未来のその深化に向かう開かれた意味があるとした。そうすると、「さっぱりわからへん」という薫さんの言葉には、桃の行動の意図が読み取れないという意味と、通常の母子間では難なく得られる身体的なつながりのうえの情動の共有が難しかったという意味も読み取れるだろう。母親を子育てに向かわせるものは、子どもが「分かる」という関係の中で満たされる心情である。身体と行為はそこにあるのに桃の思いに触れられないことが悲しい。現在、することを着々とこなし、確信に満ち、充実したときを送っているように見えた薫さん。筆者は自分の子育ての経験から何とか一致点を持ち出して桃と薫さんの関係性の困難を類推しようと試みるのだが、まだまだそのたいへんさを分かち合える水準で感じられたとは思えなかった。では、薫さんにとっての構造化のプログラムはどういうものだったのだろうか。

対話2 構造化のプログラムがもたらした喜び

筆者：「光とともに」をまねしたん？

薫さん：理論的なことはわからない、年少のとき、写真をとっているんなものを見せたらそれで入ったんですね。全然分かってなかったんや(大きく)と思って。この部屋の中で見なあかんところを抜き出すことができてないんですよ。テレビはこれ、全体がピアノなんやで、冷蔵庫なんやでって。とにかく切り取って見せな分からへんってことが分かって、あれこれ写真とって、庭か、これが庭か、幼稚園かっていう感じやったんですよ、それほど分かってなかった。

筆者：(驚き)言葉と一致してしゃべりだしたん？

[考察] 筆者が発した「1日1日過ごしていくって

薫さん：増えましたね。「お母さん」という言葉と私とが一致してなかったですね。入園する前の夏3歳の直前に初めてしゃべった言葉が青ですね。色はしきりがありません。この色が青なんやっていうことは分かったんです。「お母さん」も実際、呼びかけるのにはそこから何カ月もかかるんですけどね。私が幼稚園迎えに行くと、顔見たらちゃい声で「お母さん」って言ったって先生が。私の前に来て「お母さん」とは言わないんですけどね。自分が写真で覚えてるものと一致させて、これがピアノでこれがお母さんかって。(幼稚園の話があって)構造化のプログラムとかじゃなくって、そういうのをやってそこそこかたちになったところに、これは構造化のプログラムの一部やったんやなってやっと分かったんですね。(爆笑)

筆者：えらい最近や(2人で笑う)楽になった?

薫さん：今は桃に自分がどうしたらいいか分かっているし。にっちもさっちもいきませんって状態ではない。私が落ち着いたから桃も落ち着いた。相互効果かな。(後略)

【考察】この語りによって、薫さんが構造化のプログラムを単に行動を制御するために使っているのではないことが分かり、筆者はほっとするうれしさを感じていた。薫さんは「桃の分かり方」を視覚を切り取るということに求めている。それによって、見えているものと言葉を一致させるということを通して、桃に自分がいる世界を認識して欲しいと思っている。薫さんは長く続いた桃のことが分からない日々を経て、やっと得られた分かる感じが喜びとなりそれが、原動力となり夢中で写真を撮っていたのだろう。この方法が薫さんを裏切らなかったことは事実なのであり、ここに桃の能力の向上というより、自分と子どもの関係の中で、自分が行ったことで、桃が変わったことへの充足感が感じられる。

薫さんは「お母さん」という言葉もピアノと並列に語っているが、筆者はそこに何らかの彼女の喜び、感動が含まれていると感じた。桃は「お母さん」と呼びかけるまでの何カ月かの間に薫さんの傾倒的な働きかけ、また充足感に応えるように、母親への信頼感を心の中で育てていたのではないか。ここに一方通行ではない心的な相互交流が生まれた。「私

が落ち着いたから桃も落ち着いた」にも、自分が未知なる不安の中にいる状態から脱することができた心的な変化が、桃にも伝わるという相互的な気づきが表れている。薫さんは「分かり方」の指針を手に入れることにより、桃と共に生きることに向き合った展望を見いだせるようになってきた。そして、自分が子どもを分からないという視点から、子どもは分かってもらえなくて不安の中にあるという視点の転換をもたらし、桃の主観的な体験の理解へと向かった。

対話3 “人形かくし”での桃の「分かり方」

(人形かくしの話になって)

筆者：ルールが分かるかなっていうのは気にしてたんや、どう思った?

薫さん：ルールは難しいのは難しいですよ。いったん見えなくなるでしょう、自閉の子みんなやけど、見えなくなったらないものってなってしまうんで。小さいころ「いないいないばー」ってしたらもう、しゅーっと本人がいなくなる(笑)。それほど分からなかったんですね。ちょっとずつ、いるのを見つけて、いなかった人が帰ってくるとか、だんだん分かるようになってきて。最近プールでもね「田中君くん見つけた」言うて。あの「見つけた」が、どこからきたのか分からないんですよ、最近お父さんが違う部屋に行ってる、探すってわけじゃないけど自分が2階にいてお父さんがいたら「お父さん見つけた」っていうのがあって、家でそういうことがあったから、見つけるっていうのをだれかがやって、見つけたっていう瞬間を見たらなんとなく分かるかな、分からんかもしれんな、微妙って思った。(中略)

見つけるっていうことがけっこう入ってるみたいで、たぶん、一番最初のきっかけは、お風呂でお父さんが手になんか持って、どっちに入ってるってやってたんですよ。最初はそれだったと思うんです。

【考察】“いないいないばー”はふれあいの関係、他者や世界との原初の関係に根ざしたもの(西村, 1989)であり、単に認知の発達を表現するゲームではない。スターンもこれを例に引き「2人間の相互創作」(Stern, 1985)と表現しているが、乳児期の

桃には薫さんが共にある他者ではなかったことがうかがえる。しかし、いてくれてうれしい田中君や父親を「見つけた」と言う桃は、他者と共にある自己であり、その言葉は語用的なものではなく、すでに情動が含まれたものとして存在している。

そのことに薫さんの意識も向きつつあるとも思えるのだが、その萌芽はあるものの、依然、筆者と薫さんの場面の見方にはずれがある。筆者は桃の喜びが筆者の感動になったことを薫さんに伝えたいと思っているが、薫さんはその点はあっけなくやり過ごし、あくまでも、「見つけた」の解釈が中心になっている。言葉の獲得という文脈からこのような流れになったとも考えられるが、子どもに対して肯定的なことを言っても、手放しで共感せず、一喜一憂しない身の処し方をわざとしているのではないかとも思えるようなことは、自閉症児を持つ母親と話しているときにしばしばあり、そんなとき、筆者は厳しい現実を垣間見るようで、居心地の悪さを感じる。薫さんと筆者とでは桃と共に過ごした歴史の違いが表れたとも言える。筆者にしてみればこの場面の桃と喜びが共有できたことがとても大きな、初めてとも言える体験だったのだが、薫さんにとってはすでに情動の共有は安定したものなのかもしれない。

ここから、P 終盤のエピソードと、それにまつわる薫さんの対話を提示する。

エピソード 4 “かくれんぼ” —他者とのつながり (8月29日)

午後のプログラムであるシャボン玉が終わり、2階の和室に戻ると、終わりの会までの15分ほど、誰からともなく、“かくれんぼ”をしようということになる。

まず、ある子どもが鬼になり、見つけられたボランティアたちが大げさに反応して、場全体に楽しい雰囲気が充ちる。桃は部屋の隅ににこにこして立っているだけだったので、すぐ見つけられた。筆者が「次の鬼は」と言って部屋を見渡すと、桃が帽子をかぶり、靴をはき、鬼になる準備が完了している。そこで、「じゃ、桃が鬼ね」と言って、筆者はふすまの裏に隠れる。桃が入室して、隠れていた人が次々と見つけられる声がある。ジャーンとカーテンが開く

音がして、桃の「見つけた」という大きな声がある。田中君が見つけられたらしく「見つかりました」とおどけた声がある。「もうみんな見つかったかな、あれ、まだのりちゃんがいらない」と田中君の声がしたそのとき、がらっとふすまが開き、桃が「見つけました」と叫ぶ。

【考察】 桃は誰にうながされたわけでもないのに鬼になる気満々で準備をしており、筆者はおかしく、またうれしくもあった。筆者は和室の隅の入り口に立ち、ふすまをしめて隠れ、気配に耳をすます。桃が次々と見つける様子が伝わってくる。田中君は“人形かくし”の際、桃が人形を見つけたカーテンでしきられた物入れに隠れているらしい。あの日と同じようにカーテンを開け、桃は田中君を見つけた。その場と桃はピークを迎え、筆者にはそこにそのまま残り残されるのではという思いがちらりと頭をよぎる。鬼から逃れて隠れているはずなのに、見つけてくれることを願っている。そのとき田中君が「のりちゃんがいらない」と言ってくれたことでかろうじて遊びは続行され、筆者はほっとした。そして、筆者を見つけた桃は上気した顔でそこに立っていた。

図らずも桃には“人形かくし”が発展したような形で“かくれんぼ”ができたのではないか。見つからないように隠れているが、実は見つけて欲しい、隠れている人の思いがあり、それを制御するのは鬼であるという関係性が体感できる。見つかった人は派手にリアクションしてくれて、見つけた喜びがさらに大きくなる。

対話 4 薫さんの桃への「成り込み」

夏休みが終わり、Pの子どもと母親、ボランティアたちはそれぞれの場所に帰って行った。Pの最終日、桃にかかわった人たちは彼女がその思い出を記した絵日記をプレゼントされた。私がもらった絵日記には「見つけた」のかくれんぼのエピソードと、家に来たときの猫のことが描かれており、この二つのエピソードは私にとっても最も印象深いエピソードであったので、桃もそう感じてくれていたことが何よりうれしい驚きだった。そして、もっと桃の心に刻まれた人がいた。

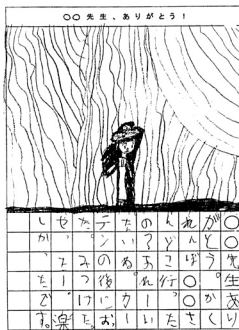


図 田中君への絵日記

(筆者がもらった絵日記の話の後)

筆者：それで、田中君には何書いたん？

薫さん：おもしろかったですよ。田中君は結局描かずじまいで。こうやって描いてて(手で曲線を描き)何かなあと思ってたら、自分は描いてるんですよ、「桃、田中君どこ？」って聞いたら「田中君カーテンに隠れてるやん」、カーテンを一生懸命描いてこの向こうに田中君がおるんや(図)。

私：すごい(鳥肌が立つ)

薫さん：(興奮を隠さぬまま)それこそ“いないいいばー”が分からなかった人が、隠れてて、このあと田中君出てくるよってという期待感を持って、それはそれはねうれしそうに。こうね、カーテンのひだを描きながら「田中君どこいった。どこかな、どこにおるかな」(桃の声色をまねてつぶやくように)って言いながら描いてて。すごいびっくりして、はあ、やっぱり、育つんやなあって(感動を解き放つように)。田中君には気、いってるんやな。初めてですね、そういう絵は。今年はボランティアがはっきり出てくる。やっぱり、楽しい経験があったらこんなに違うんやなあって。

[考察] 田中君への絵日記について語り始めた薫さんはそれまで分析的に述べていたのとは明らかに様子が違っていた。桃がその絵日記を描いているときの様子を語る薫さんもまた楽しげで、桃が今ここで絵日記を描いているように、説明するというよりも、演じているようだった。鯨岡(1997)は養育者の「いつも、すでに」のメタ水準の関心が作動している下で、「このいま」の瞬間において自分の「ここ」から相手の「そこ」に気持ちを持ち出し、その重ね合わせから相手の「そこ」を一時的に生きる様態を

「成り込み」と呼んだ。話しているのは薫さんだが、薫さんが感じた桃を、薫さんを通して筆者は感じる事ができた。

人によって描き分けているということは、明らかに「誰に語るか」が意識され、その人との関係性の深化によって桃の中での存在感が異なっていることの証である。カーテンの向こう側に自分の大好きな田中君がいて、自分が見つけて田中君が出てくることを期待して待っている場面を描くことによって、もう一度体験する絵である。田中君はそこに見えてはいないが、確かに桃の中には「共にある」。「見つけた」という言葉がどういう文脈で使われるかを理解して使うことではなく、田中君との関係性の中で起きていることを鮮やかに表現している。

薫さんも言葉を獲得したこと以上に、田中君と桃の間に情動の交流があることに大きな感動を覚えている。自分のかかわりによって着実に発達してきたと思える桃が、それを超えて大きく飛躍する姿に、子どもの質的な変化を感じた瞬間ではなかったか。薫さんが「やっぱり、育つんやなあって」この言葉を発したとき、これまで、近づけた実感がなかなか持てなかった薫さんに対して、子どもの発達を喜ぶ母親としての共感確かなものであった。

4. 総合考察

(1) 薫さんの桃の「分かり方」

最も根源的で、発達の源泉である母子間の情動共有が難しいことは、他者を理解し、共にあることへの理解そのものの困難を生み出す。薫さんはまず桃に、自分たちの生きている世界を分かって欲しいと思い、構造化のプログラムに取り組むこととなる。薫さんはどんなときも桃に何か欠損しているとは見ておらず、外部からの働きかけによって、それを取り込むことで伸びるという、形成的な見方をしている。構造化のプログラムを通して得られた子どもを「分かる」感じが、薫さんの中には強く生きており、障碍特性への対応として、桃の言葉の理解を、視覚情報と場面を結び付け、教え込むという方法に傾斜させる。これは確かに母親と子どもの相互作用の内容を変えることとなるのだが、薫さんと桃にとって構造化のプログラムは、薫さんが桃との間にこの基底的な関係を作るために用いた1つの手段であり、母親の動機は行動の変容ではなく、子ども

を分かりたいという心情なのである。

手段を持たない筆者は、桃と場を共にする1回1回の活動の中で関係性を作ろうとし、桃の振る舞いから、また、間主観的に伝わってくるものから彼女の気持ちを探ろうとする。初期の段階では桃の背後にある薫さんの存在、考え方、または「自閉症」というレッテルに影響され、桃の行動を解釈する部分があるが、場を共にすることを重ね、桃がPの中で生き生き活動するようになると、桃の情動が身体に通底するように分かり始める。このように筆者と薫さんの「分かり方」は違う図式を描いていった。

しかし、田中君への絵日記の話題から、薫さんの桃の「分かり方」がそれまでの語りとは全く違うように感じられた。他者は桃の中に何らかの表象の形で、存在できるようになるが、どの人にも同じ水準で存在するのではなく、人によって感じ分けられ、関係の深まりの違いによって、人によって違う姿として存在するようになっていく。そして、さらに親密さを共有しようという情動が発現し、親しい他者とのかかわりを求める。このように、人と人とのコミュニケーションは常に情動を含むのである。

このような自分の理解を超えた桃の姿に接したとき、薫さんはこれまでにない喜びを感じた。田中君への絵日記の感動を伝えるときに薫さんは子どもに「成り込む」ことを行っていた。これは、母親一般に備わる基底的な構えであり、通常の子育てと何ら変わるものではない。薫さんの感動は筆者にも強く伝わってき、桃を二人で見る直接的な関係性を感じられた。子どもが育つということは、人へと向かう情動が子どもの中に育まれ、それを基礎にした子ども自身の能動的な営みであり、自己自身の形成と表裏して、親しい他者との関係性の中で行動が形成されるということの了解が筆者と薫さんを隔てていたものを取り去ったのである。

(2) 自閉症児への向かい方

対話を振り返ると、筆者と薫さんは桃の「分かり方」について、それぞれが自分の納得のための図式を描き、平行線をたどっているように見える。筆者は桃と共感できた喜びを薫さんに伝えようとするのだが、薫さんには自分の納得の図式に筆者を立ち入らせないような厳しさも依然、感じられるのだった。しかし、桃の絵日記を語る薫さんの身体からし

み出てくるものを筆者の身体が感受するというような関係を生きられたとき、薫さんが構造化のプログラムに向かう気持ちは筆者と対立するものではなく、子どものために何かをせずにはおれない母親の、当たり前な心情として腑に落ちたのである。と同時に、ここに支援する側としての筆者を相対化する鍵がある。桃、薫さん双方に対し、そう簡単に「分かる」と言っていないものかと躊躇することは、薫さんが積み重ねてきたものへの敬意がある一方、自閉症という障害を持つ子ども、自分とは違うたいへんな子どもを持つ人として対象化し、そのカテゴリーに押しとどめるものではなかったか。また、薫さんの生に迫りたいとしながらも、二者択一の選択を薫さんに迫り、筆者が正解だと思う方向へ、理念の一致を目指していなかったか。このような自分のあり様を再考させられることとなったのである。

桃自身が、自分を成長させ、変化させる力と、心的に、いかに人を求める強い欲求があるかということ筆者と薫さんに示してくれた。そのことを薫さんと私は共に見、桃を1個の主体として受け止めることができたことで、同じ地平に立つことができた。

自閉症児と良好な関係を築きたいと願っているとき、子どもがネガティブな情動を体験することは避けたいと誰しもが思うだろうし、私にも臆する面があった。しかし、子どもが会おうことすべてに先回りして転ばないように配慮することは不可能である。子どもが体験した情動に対し、どんなときも共にあることを身をもって示し、子どもの可能性を無限に信じる。また、ポジティブな情動のときは、その楽しさを移し返す。こうしたことが必要なのではないか。行動の発達を促進するために情動の共有を意図し、それを利用するのではない。自閉症児を療育対象と見る前に、子どもと共にその場におり、「育てる一育てられる」という関係性を素朴に生きようとする中で、子どもと思いが通じる喜びを感じることは誰にでも体験できることだと思う。

この夏の体験は、桃に添いながらも、彼女がさらにどのような世界に開かれていくのかを理解する道程ではなかったか。お互いに変容があり、お互いがそれを感じることを繰り返しの途中で、桃が次に必要なことを私に教えてくれた一夏だった。

何が桃の関係性の変容をもたらしたのかについて

て、身体-関係の視座が重要であろうことは示唆したが、ほとんど触れられなかった。さらに、方法論の整備をし、構造化のプログラムに支えられたことも含め、その関係発達のための1つのプロセスを明らかにしていくことが、本稿に残された課題である。

謝 辞

本論文の作成にあたり、協力していただいた障児学童保育Pの皆さんに心より感謝申し上げます。

引用文献

- 別府 哲 1997 自閉症児の愛着行動と他者の心の理解. 心理学評論, 40, 145-157.
- 船津守久・李木明德 2002 子育てのバリアー自閉症のある子どもを育てる母親の子育ての語りから. 特殊教育学研究, 8, 65-75.
- 石井哲夫 2002 自閉症児の心を育てる—その理解と療育. 明石書店.
- 小林隆児 2000 自閉症の関係障害臨床. ミネルヴァ書房.
- 鯨岡 峻 1997 原初的コミュニケーションの諸相. ミネルヴァ書房.
- 鯨岡 峻 2005 エピソード記述入門 実践と質的研究のために. ミネルヴァ書房.
- メジボフ, G. B.・シェア, V.・ショプラー, E.; 服巻智子・服巻 繁(訳) 2007 自閉症スペクトラム障害の人へのトータル・アプローチ. TEACCHとは何か. エンパワメント研究所. (Mesibov, G. B., Shea, V., & Schopler, E. 2004 *The TEACCH Approach to Autism Spectrum Disorders*. Berlin: Springer.)
- 西村清和 1989 遊びの現象学. 勁草書房.
- 奥田健次・井上雅彦 1997 自閉症児における家庭中心型指導による早期教育. 障害児教育実践研究, 5, 25-34.
- 坂本 裕 2000 教師による母親の事情にあわせたコンサルテーション—母親が自閉症であるわが子の入浴行動の形成を支援した事例と身支度行動の形成を支援した事例を通して—. 特殊教育学研究, 38(5), 79-85.
- Stern, D. N. 1985 *The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology*, Karnac, London.
- 滝川一廣 2004 こころの本質とは何か. ちくま新書.
- 東條 恵 2007 早期発見・療育・支援とは何か? そだちの科学, 8, 34-40.
- トレヴァーセン, C.・エイケン, K.・パパーディ, D.・ロバーツ, J.; 中野 茂・伊藤良子・近藤清美(監訳) 2005 自閉症の子どもたち 間主観性の発達心理学からのアプローチ. ミネルヴァ書房. (Trevarthen, C., Aitken, K., Papoudi, D., & Roberts, J. 1998 *Children with Autism Diagnosis and Intervention to Meet Their Needs*, 2nd edition. London: Jessica Kingsley Publishers.)
- 坂口美幸・別府 哲 2007 就学前の自閉症児を持つ母親のストレスの構造. 特殊教育学研究, 45, 127-136.
- 須原美佐 2008 これは誰のことは? —“孤独な守り”から“関係”へ—. 治療学研究, 第28輯, 85-95.
- 宇田川久美子 2005 自閉傾向のある子どもとのコミュニケーションの場を広げる‘真似ること’の役割とその意義. 保育学研究, 43(1), 27-38.
- ウィング, L.; 久保絃章・佐々木正美・清水康夫(訳) 1998 自閉症スペクトラム: 親と専門家のためのガイドブック. 東京書籍. (Wing, L. 1997 *The Autistic Spectrum: A Guide for Parents and Professionals*. London: Canstable.)
- 山崎徳子 2005 つながったと思えること—障害児保育の場の〈感性的なコミュニケーション〉を記述する—. 京都大学大学院人間・環境学研究科修士論文.

(受稿: 2009. 1. 6, 受理: 2009. 3. 25)